

コロナ禍は都市の風景に  
変化をもたらすのだろうか。

2020年10月に国土交通省から発表された「全国の都市における生活・行動の変化―新型コロナ生活行動調査―」によれば、都市に対し、ゆとりある屋外空間の充実や、自転車や徒歩で回遊できる空間の充実を求める人が多いとの結果が示されている。確かに筆者もこの1年、これまで以上に自宅周辺を散策し、テークアウトに使えるような粋な飲食店を探し回った気がする。

## コロナ禍での都市風景

専門分野である建築計画や建築設計に引き寄せれば、徒歩圏内の都市空間を住民が自らの手で生活に必要な空間へと変えていく、クリティカル・アーバニズムやプレイス・メイキングと呼ばれるまちづくりの思想につながっていく観点が多い。そこで求められている空間とは、自宅でもなく職場でもない第3の居場所、いわゆるサードプレイスである。

そこで、コロナ禍以前より、第3の居場所として注目される、2018年、東京都墨田区の街角にオープンした「喫茶ランドリー」という小さなお店を事例に出したい。この喫茶店は、

飲食機能だけでなく、洗濯

である。振り返ると、20世紀の建築は、単一の用途や

全国一律の仕様で整備されてきた歴史である。美術館は美術館、図書館は図書館、劇場は劇場として計画し、専門性を深めることで、それらの質が担保されてきた側面がある。しかし、ダイバーシティの重要性が叫ばれる昨今、都市の界限では、先述のランドリーのように、多様な人々が共生できるコミュニティの場の計画と運用が求められている。

こうしたトレンドは、コロナ禍に関係なく、都市における界限の風景に変化をもたらす始めていると言えるが、一方で2020年6月には、いち早く、国土交通省による緊急措置として、

路上の新たな活動の可能性を見出す法整備なども行われており、変化のスピードはコロナ禍の中でより一層加速するのかもしれない。

筆者の研究室では「学生参加の建築デザイン」をテーマに、地域住民との対話を大切にしながら、ストリートに快適な時間が過こせる場を仕掛けたり、空きスペースにコミュニティの場を整備したり、ワークショップで社会の課題に向き合ったり、といった近年のトレンドに沿ったプロジェクトを多数手掛けている。

コロナ禍によって、人々の意識が自身の生活する界限に向かいつつあるいま、研究室の活動もこの時流にのって加速させていきたい。

## 求められる多様性ある

## コミュニティの場

る。

これは、歩いて回れる範囲で充実した暮らしができる界限（かいわい）の重要性を意味しており、筆者の



名城大学理工学部  
建築学科准教授

谷田 真

機やマシン、アイロンなど家事機能を備えており、年齢や職業にかかわらず、多様な住民が集い、日々さまざまな活動に使われているという。お店の枠に捉われず、オープンな設えを街に對して示し、日常的に人の流動性を高めることで、住民の満足度のみならず、界限の価値も高めている好例と言える。

ここで展開されている手法は、端的に言ってしまうと、異種用途の掛け合わせ

たにだ・まこと 建築計画、

建築設計。名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程後期修了。1971年生まれ。

